長編ストーリー付き３DCG集

鮮血の魔戦士

体験版

ざこきゃら堂

第一話　魔戦士

「あんたに、巫女様は、渡さない」

魔戦士の前に、娘が立ちはだかる

「わたしは、神殿からの使いです。ただ、巫女殿をお迎えに来ただけ。どいていただけませんか」

「嫌だと言ったら？　戦うかい？」

「……」

「ふん、あんた達の噂は知っているぜ。『神殿の守護人』と称した『処刑人』だってな」

「…っ…」

魔戦士が、かすかに返事につまったとき

「その方は、わたくしを護衛するために、わざわざ、いらっしゃったのですよ」
金色の髪の娘が、近寄って来た

「申し訳ありません、最近いろいろありまして。どうか彼女を許してください」

「巫女様、出てきちゃいけない。こいつ女だ」

「…あら…珍しいですね」

「あんたのお色気攻撃は、きかない。下がってるんだ」

「一度もしたことありませんよ。心配しないで。二人にしてください」

「使者様、失礼を。彼女は、この里の自警団で、この前、盗賊団に襲われて、かなり警戒をしているのです」
「……巫女殿、都の神殿までご同行願います」

「ええと…理由を聞いてもいいでしょうか」

「……すみません、巫女殿を連れてくるよう、命令されただけです。道中は、わたしが護ります」

「すぐじゃないとダメですか？　最近、里の周りが、妙に物騒なのが、気になりまして」

黙り身体を強張らせた魔戦士に、巫女は焦った

「あ、あの、わたくしも、使者様とご一緒したいのですが、里の方々にはお世話になりまして、せめて結界の強化を…」

「きゃ！？」

巫女は、魔戦士に、腰を掴まれ、身体を引き寄せられた

「え？　な……」

もう片方の手ではった魔法陣が、巫女にめがけてきた魔法弾をはじいている

「たしかに、すぐには、無理そうですね」

「！？　あの娘はどこに！？」

「……」

緑の娘は、攻撃された方向に、走り

「せい！」

巫女を襲った男の一人を、倒していた

「な、なんだ、こいつ」

見た目と違う意外な強さに、男たちは、驚いている

「あたしは、里の自警団リーダーだ！」

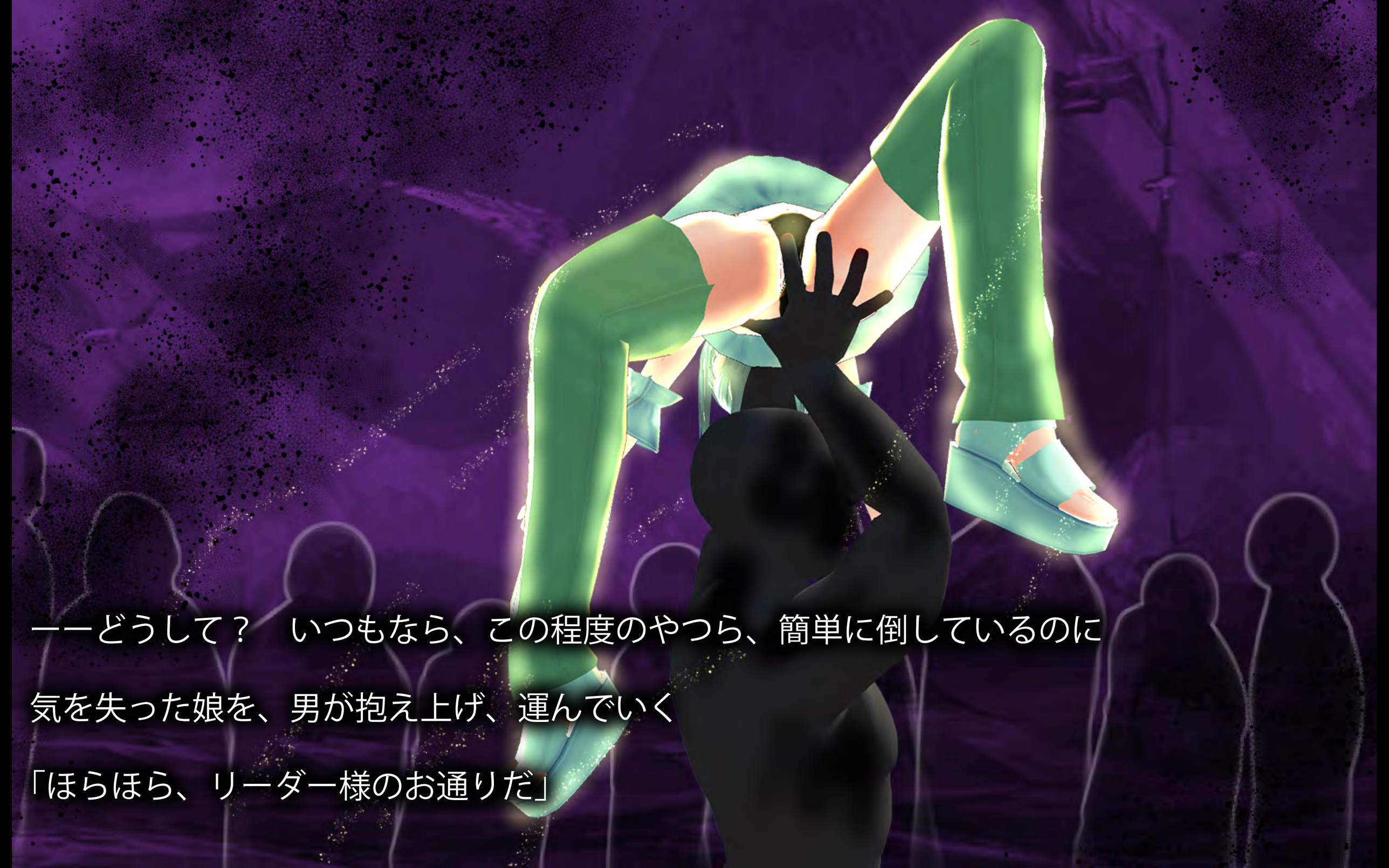
娘は男たちを押していた

「てめえら、よくも巫女様を…」

「うぐ！？」

「一人で乗り込んでくるとは、勇気のあるお嬢さんだ」

娘の身体は、男の拳で軽く宙に浮かされる



――どうして？　いつもなら、この程度のやつら、簡単に倒しているのに

気を失った娘を、男が抱え上げ、運んでいく

「ほらほら、リーダー様のお通りだ」

瘴気が辺りを満ちてきた

普通の人間なら、身体を害し、動けなくなるレベル

「さて、ここいら辺でいいか」

娘とて、普段は、用心深く行動していた

だが、その日は、魔戦士が来た

――あいつが、何かする前に、解決しないと

「いいか、てめえら！」

――くそ…このままじゃ、皆を危険な目に…

「里の人達に手を出したら、ただじゃおかないからな！」

「わかっておりますよ、リーダー」

「……え……」

その裸体が、盗賊たちの目に、どのように映っているか、娘は、自覚する

「これから、勇敢な自警団のリーダー様のお相手で、忙しくなるからなぁ」

別の男に、乳首をつままれ、もう片方の手が、柔らかい肌を押しながら、腰から下へとおりていく

「や、やめ…」

「こら、一人で楽しむなよ」

「ああ、悪い、悪い」

娘の秘部を魅せるために、足を上げる

盗賊たちが寄ってくる

「……う……」

娘は、恐怖ですくみあがる

「かわいそうに。泣いているじゃねえか、ひひ……」

パリンと

何かがはじけた

「歩けますか？　増援が来る前に、この場を離れたい」

娘の手首を拘束していた魔法陣が、壊れた音だった

蒼い光が、鞭のように動き、盗賊たちを倒し、魔戦士を中心に回っていた

「わたしから、前に出ないように」

魔戦士を覆っていた黒い衣が、蒼い靄となり、緑の娘にまとわりつく

「うお！？」

そして、娘の裸体を隠すように、あらたな衣となった

――…すごい…

魔戦士の二つ手から、蒼い筋が流れ、悪党たちを倒していく

「く！　ビビっちまったが、次は、あたしの番だ！　あんたは、休んで、全部まかせてくれ！」

「対象は、すべて無効化は終了しました。神殿に心話で連絡終了です。里に帰りましょう」

「ただいま～」

せめて里の入り口前で、元の服に着替えさせてくれと、魔戦士に頼んだ

「ああ…よかった…いえ、怪我をしています、こちらへ」

「こんなのいつものこと…じゃなかったな」

謎の瘴気、その中で平気で動けた男たち

「無茶はしないで。使者様は危険が解決するまで、滞在してくださるとおっしゃってますから」

第一話　魔戦士　完

幕間一

――　それは過去の記憶、過去の話　――

それは歪んだ禁呪で、造られた魔獣

もう造った主はいない

本能のまま喰らったからだ

魔獣は野放し

魔獣は目的もなく存在するのみ

『みこ うらぎった』

否、存在する欲望が一つ

『さがす　きりきざむ　つめで　きばで　みこを』

第一話　妖樹

普段、巫女にも注意されている

身の丈の合わない場所に、入り込んだ自覚はある

「質問があります」

――くそ、最悪だ！

「ふん、巫女様の居場所なら、知らないね」

魔戦士の手から、蒼い筋が光る

「ど、どんな拷問されたって、知らないもんは、知らないんだよ！」

魔戦士は、手をかざした

蒼い筋が、娘を拘束していた幹を切り刻む

「ひえぇえええ！　誰か後を頼むぅううう！」

「！？」

緑の娘の身体は、蒼い光につつまれる

宙に浮いた身体は、静かに地におろされる

――何をして…！？

うねりながら襲いかかる幹が、魔戦士の前で、はじかれてた、

「わたしの前に出ないように……っ…」

――…え、え、もしかして、助けてくれたのか？

蒼い光がまぶしくて、よく見えないが、

「餌と認識されたら命はない」

と、散々、叩き込まれた妖樹相手に、
一歩も引かない

――…正直、こいつは強いから…手を
借りたい…けど…

娘は、悟られぬように先に進む

――……頼むだけ時間の無駄だ……あ
たしが行かなきゃ！

走り去る娘は、気がつかなかった

魔戦士が、できるかぎりの魔力で「護
りの結界」をはっていたことに

妖樹は、魔戦士の装備を貫くほどの強敵

――…最善の方法は…

魔戦士は、自身の防御魔法を霧散させる

血の匂いと、狩りやすそうな女

迷子になった里の子どもを、一緒に探せればと思ったが

――……結果的に目的は果たせましたか…

妖樹の標的が、緑の娘から完全に外れ、魔戦士のみとなった

妖樹は本能で警戒をする

魔戦士を遠巻きに攻撃した

パサリと、魔戦士の身体を覆っていたマントが落ちる

魔戦士は動かない

妖樹は、拘束が有効に効いていると判断する

魔戦士の肌が直接傷つき、血飛沫を上げ始めた

鎧が砕け、妖樹の上に飛び散る

その間も、魔戦士は動かない

いつの頃から、妖樹の異変に気がつく

緑の娘が囚われていたときから、違和感があった

――妖樹の目的は……

蔓が魔戦士の身体に巻き付く

――拘束…そして…

――贄として捧げる気か

上位の妖魔か、封印されし邪神にか

身体は予想以上に、傷つけられ、弱っている

――自分がすべきことは…

魔戦士の役目は、【神殿の敵】を滅すること

里に来た目的は巫女である

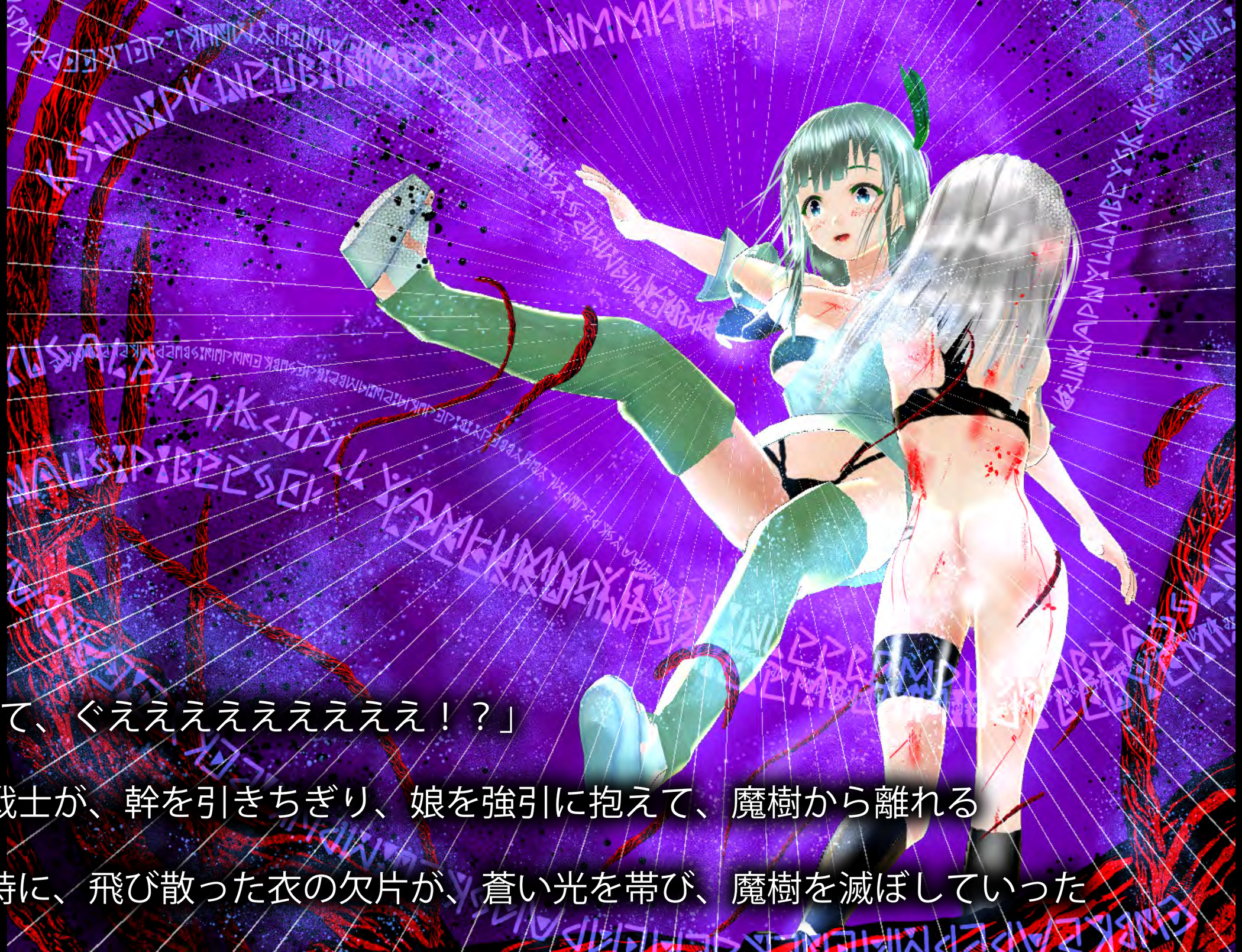
――…いくつか選択肢がある

「しっかりしろ！！」

――どうする……な！？

想像もしていなかった人物が、妖樹に傷つけられながら、魔戦士に近づいてくる

「気をしっかり持て！！　今、助けてやるからな！！」



「って、ぐえええええええええ！？」

魔戦士が、幹を引きちぎり、娘を強引に抱えて、魔樹から離れる

同時に、飛び散った衣の欠片が、蒼い光を帯び、魔樹を滅ぼしていった

「はいはい、いつでも抜け出せたってことね」

「……」

「あ、あんたが、あたしに、防御魔法、はってくれたんだろ！　あああああ、ありがとう！」

魔戦士は、妖樹が贄として運ばれた先で、死ぬまで、闘うことを選んでいただろう

「礼は必要ありません。あなたは、わたしの命を救ったのです」

「いやみかよ！？」

第二話　妖樹　完

幕間二

ーー　それは過去の記憶、過去の話　ーー

こんな田舎に任命されるなんて…自分の実力なら、都の神殿が相応なのに

「巫女様、これ、頭につけるんだ」

「これは…皆さん、身に着けている髪飾りですね」

「あ、説明してなかったっけ。御守りなんだ」

手に取ってみると、たしかに、魔よけの効果を感じる

「ありがとう。わたくしみたいな、よそ者にやさしくしてくれて、うれしいです」

冗談じゃない、こんなださいもの、頭につけたら笑い者だ

「い、一番、妖魔に狙われやすいからな…よそ者なんて、思ってねえし」

自称、自警団のリーダーは、顔を真っ赤にして、去っていった

ーー…はあ…はやく、こんな里から、離れたい

強い敵意の視線に、巫女はまだ気がついてない

体験版はここまでです

ここまで読んでくださって
ありがとうございます！

【製作サークル名】

ざこきゃら堂

https://www.dlsite.com/maniax/circle/profile/=/maker_id/RG48158.html

２０２１年６月発売